

速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査

岩 尾 松 美
酒 匂 義 明

はじめに

昭和三十七年、日本考古学協会に洞穴遺跡特別調査委員会が設置されて以来、全国各地で縄文及び先縄文文化の研究上、非常に重要な意義をもたらした遺跡の調査が行なわれてきた。大分県下においても、賀川光夫教授を中心にして、洞穴（岩陰）遺跡の調査を行つてきた。第一次聖獄洞穴における先縄文人の発見であり、第二次川原田岩陰遺跡の調査などである。

川原田岩陰遺跡においては、(一)、九州における縄文文化起源についての問題。(二)、縄文早期人骨の出土など重要な諸点を提起することができた。調査においても、特にこの二点について入念に行なわれたが、それらについては順を追つて報告する。

発掘までの経過

昭和三十八年四月中旬、大分郡速見郡山香町において岩尾松美が押捺文土器片、石器、骨角器等とともに人骨片を少量研究室に持参した。それらの遺物中、特に人骨片について興味をもたれたので、同月下旬基礎調査を行なつたところ、遺物の包含状態が層位的に把握できることや、一部攪乱層にみる遺物が早期である点などから、有望遺跡であると推定された。また本遺跡には一部人骨片の出土から遺骸埋葬の關係も考慮された。数回の基礎調査を経て、本調査を七月に予定し、人骨担当を

新潟大学医学部小片保教授、長崎大学医学部内藤芳篤助教授に依頼し、発掘主体を洞穴遺跡特別調査委員会に移項した。その後遺跡付近を通る国道十号線の拡張工事のため、遺跡への影響を懸念して、六月九日より予定をくり上げて行つた。

遺跡の立地及びその状態

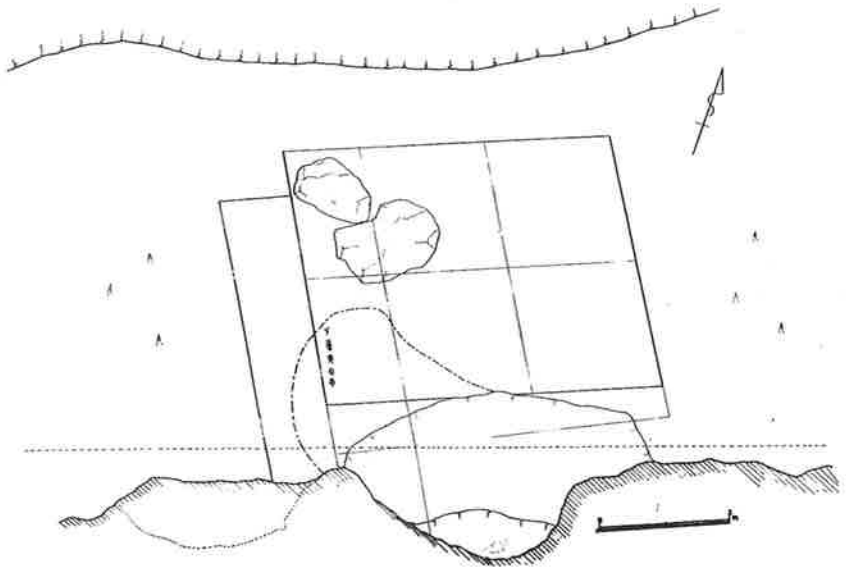
川原田遺跡は、大分県速見郡山香町大字広瀬字殿山、通称川原田に所在する岩陰遺跡である。本遺跡は国東半島の根幹部をほぼ東西に走り、杵築市を通つて別府湾に流れ込む八坂川の溪谷に沿つて、河口より約十二杆の位置にあり、北に田原（鋸山（五四三米）を望み、八坂川の河岸段丘を前にした遺跡である。遺跡を形成している磨崖は八坂川の旧河谷の侵蝕によつて形成されたものであり、角礫凝灰岩で形成されたもので、ほぼ東西に二十米程広がり、小湾曲部を三ヶ所持つ、本遺跡の主要部はその岩陰の一つであり、東北に向けて口を開いている。

遺跡の規模は、岩の最大突出部より約四米の凹面があり、彎曲面の高さは岩盤より五米を削る。住居面と考えられるテラスは中六米、高さ二米であり、磨崖に沿つて約一五米伸びている。岩陰より附近を流れる八坂川まで直線五十米、比高十米を有するが、しかしその間には階段状の水田が四枚ほど形成されているので、最下層直下の岩陰岩盤からの比高は現在八米であつた下部包含層に落石とともに、河礫の包含を見るのは当時の比高差が少いことを物語つていと解して良いだろう。

本遺跡は防空壕として利用されたことがあり、そのため遺跡のもつとも重要な部分（岩陰奥壁附近）が破壊されていた。そのため遺物の出土状況、特に攪乱層から出土した遺物からみて、既掘部はもつとも重要な場所であつたと考える。

層位及び遺物出土状況

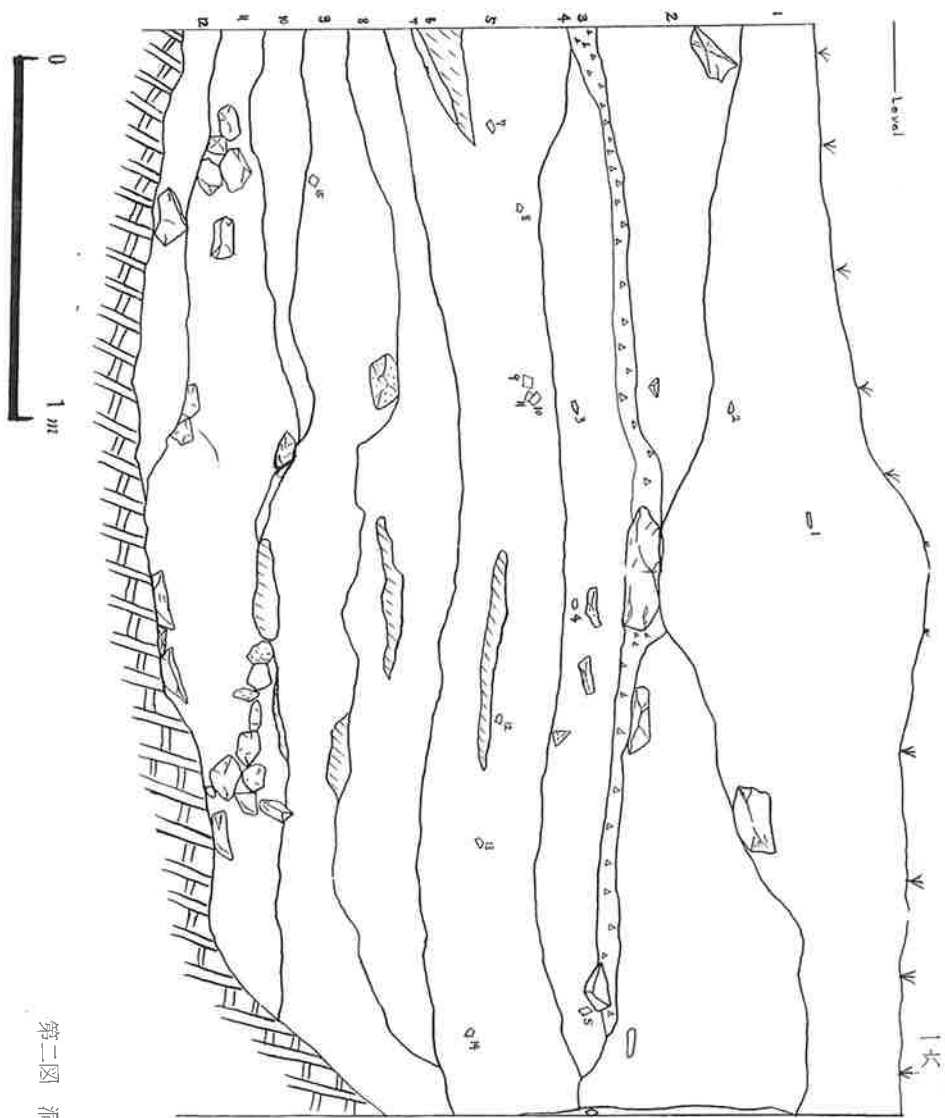
作業は基礎調査によつて明らかにされた旧防空壕の断面に露出した人骨を重要視して、第一図の如くトレンチを設定して、作業を進めた。層位についても、旧防空壕の断面をそのまま利用して、岩盤までの層位展開図第二図を作成した。



第一図 川原田洞穴（岩陰）調査トレンチ

層位は表土より岩盤まで十二層に区分されるが、その状態は

- 一層 攪乱層（一層）黒褐色混貝土層
 - 二層 黄褐色混貝土層
 - 三層 角礫凝灰岩の落石による礫層
 - 四層 褐色混貝灰層
 - 五層 四層よりやや赤色の強い褐色灰層
 - 六層 白色灰層
 - 七層 黒褐色灰層
 - 八層 黄褐色灰層
 - 九層 やや赤色を帯びた黄褐色土層
 - 十層 黒色の強い褐色土層
 - 十一層 含礫（河礫）黒色土層
 - 十二層 黒色土（河砂）層
- のように層位を確認できたが、遺物包含層としては、次のように大別できる。
- I層（一層）（攪乱一層）後期遺物包含
 - II層（二層） 中期遺物包含
 - III層（四層） 前期遺物包含
 - IV層（五、八、九、十層） 早期遺物包含



第二图 洞穴窟位图

V層（十一層） 剥片石包含

一応このように分類したが、1層は攪乱層で、一部に後期遺物包含を認めた。6、7層はいずれも5層中にある灰層でそれがサンドイッチ状になつて含まれている。10層において出土する無文土器は従来の押捺文共伴の無文土器とは異なり、焼成、色調、製法とも全く違つてゐる。11層における含礫黒色土層の礫は、3層において出土した遺跡を形成している角礫凝灰岩の落石による礫層ではなく、河礫の層と考えられる。この層において、チャート・サヌカイト類の剥片多数が発見され、攪乱層より発見されたナイフ型石器を包含する層と考えることはできるが、しかし確実な旧石器包含層としては、調査期間中には確認できなかった。

このように川原田岩陰遺跡は遺物包含の状態が明瞭であり、層の序列によつて、それぞれの遺物の前後関係を決定づけるのに、今後の押捺文土器の研究に早水台遺跡とともに、重要な役割を持つた遺跡であることは疑えない。

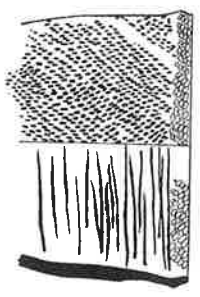
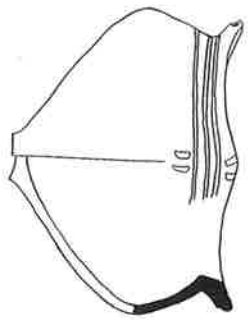
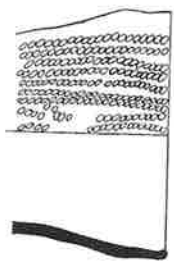
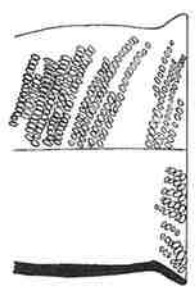
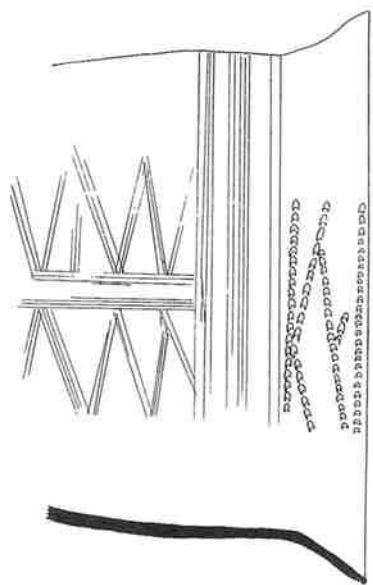
遺物

(1) 土器

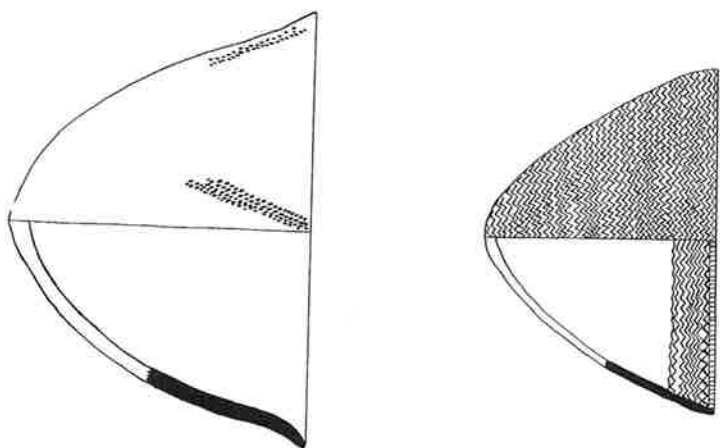
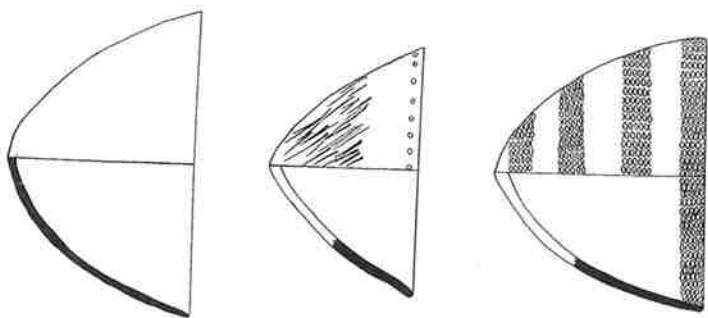
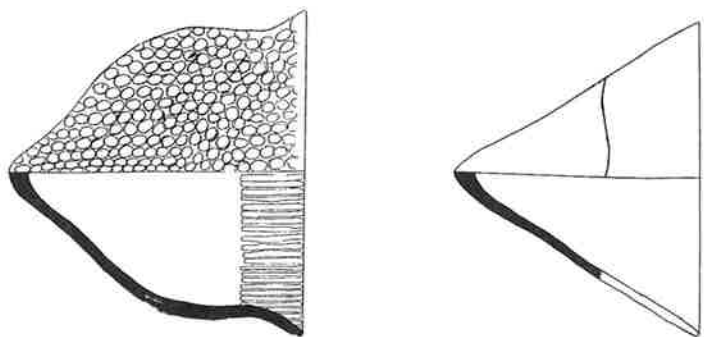
前述の如く、土器は早期から後期まで整層をなして包含されているが、次にそれらを具体的に述べる。

Ⅰ層 後期中葉以前の土器を出土する。それらは凹線文土器としての出水式系であり、鐘ヶ崎式系の磨消縄文が混在する。しかしこれら両式土器は量としては必ずしも多くはないが、両式土器の混在は極めて重要であり、この両式土器の出土により後期に比定する。

Ⅱ層 全縄文、爪形文を主体として、縄文原体を撚糸状の工具に巻きつけて施文した特殊な撚糸文が目される。この層から出土した土器は器型、縄文の工具などからして、おそらく中国地方の中津式土器に対比できると思われるが、本層は遺物が



第三图 I~III层出土土器



第四图 IV·V 层出土土器

稀薄であるため、他に比較材料を欠いた。特殊捺糸文の出土など類例に乏しく、時期比定困難なものであるが、一応中期土器としておく。

Ⅲ層 厚手の円筒形土器、又は薄手の細隆起線文土器を出土する。前者は塞神式系の朝顔状円筒土器で、細線と貝殻腹線部の押捺を以つて器面を飾る。後者は所謂轟系の細隆起線文を施し、竹管状の刺突文を併用することがあり、又爪形文をもつて口縁部附近に文様を施す類が少量ながら存在する。その他曾畑式系の土器片もみられることなどからして、Ⅲ層を前期とすることに異論はない。

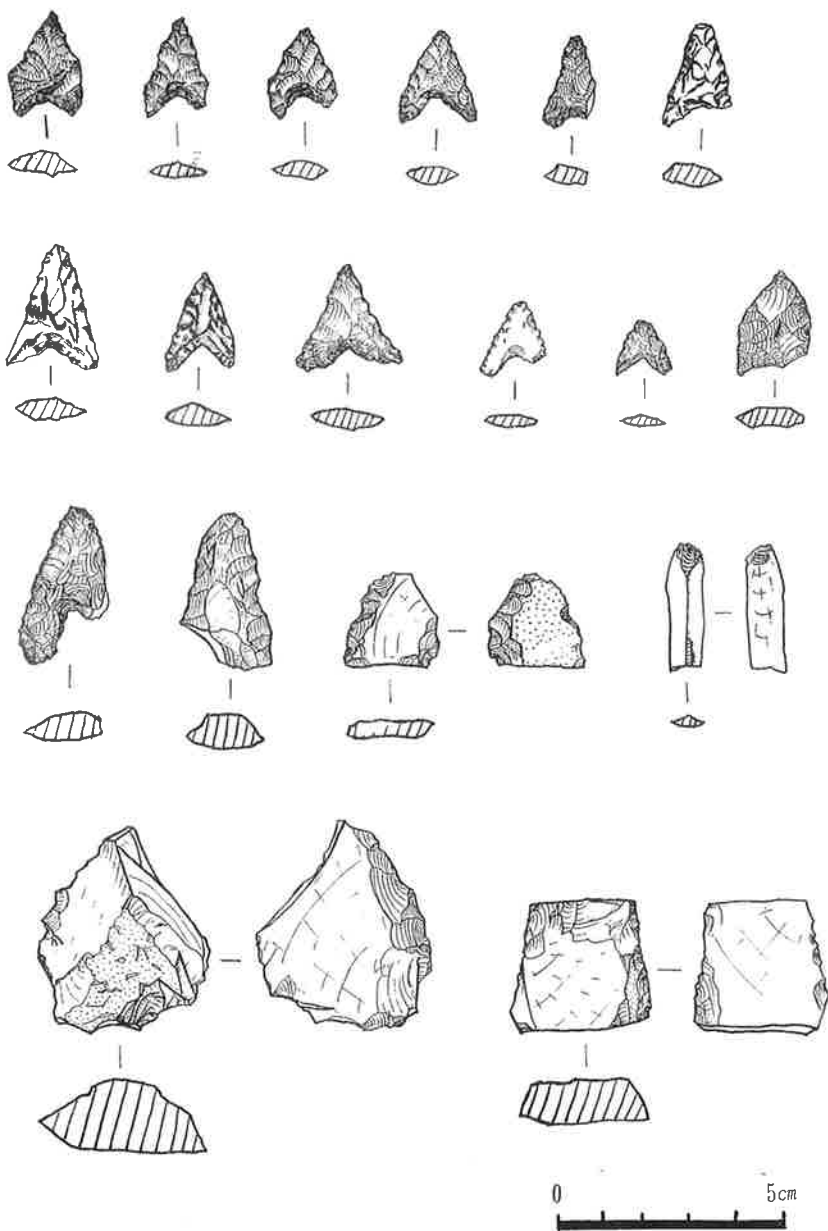
Ⅳ層は早期遺物を出土するが、土器形態の変化に伴い、Ⅳ層を(a)・(b)・(c)の三層に小別する。

Ⅳ(a)層は高山寺式系の大型土器を出土した。その土器は大型楕円文を有し、器壁が厚く土器の内面にいたつては、押捺文の原体擦過痕跡の太い条痕が口縁部に施文され、底は著しく尖る土器である。Ⅳ(b)層は所謂早水台式系の押捺文土器を主体としている。それは整然とした山形文及び小型楕円文を混用しており、口唇部に押捺文の原体を回転せずそのまま押捺して施した文様をもつ土器がある。その他小型楕円文土器において、文様を一部だけベルト状に施した小型尖底土器がみられる。Ⅳ(b)層の土器はいずれも小型尖底土器で、早水台一式を併行し、Ⅳ(a)層は高山寺系土器で田村式土器に併行するものと考えられる。このⅣ(a)・(b)層には少量ながら捺糸文の共伴をみる。

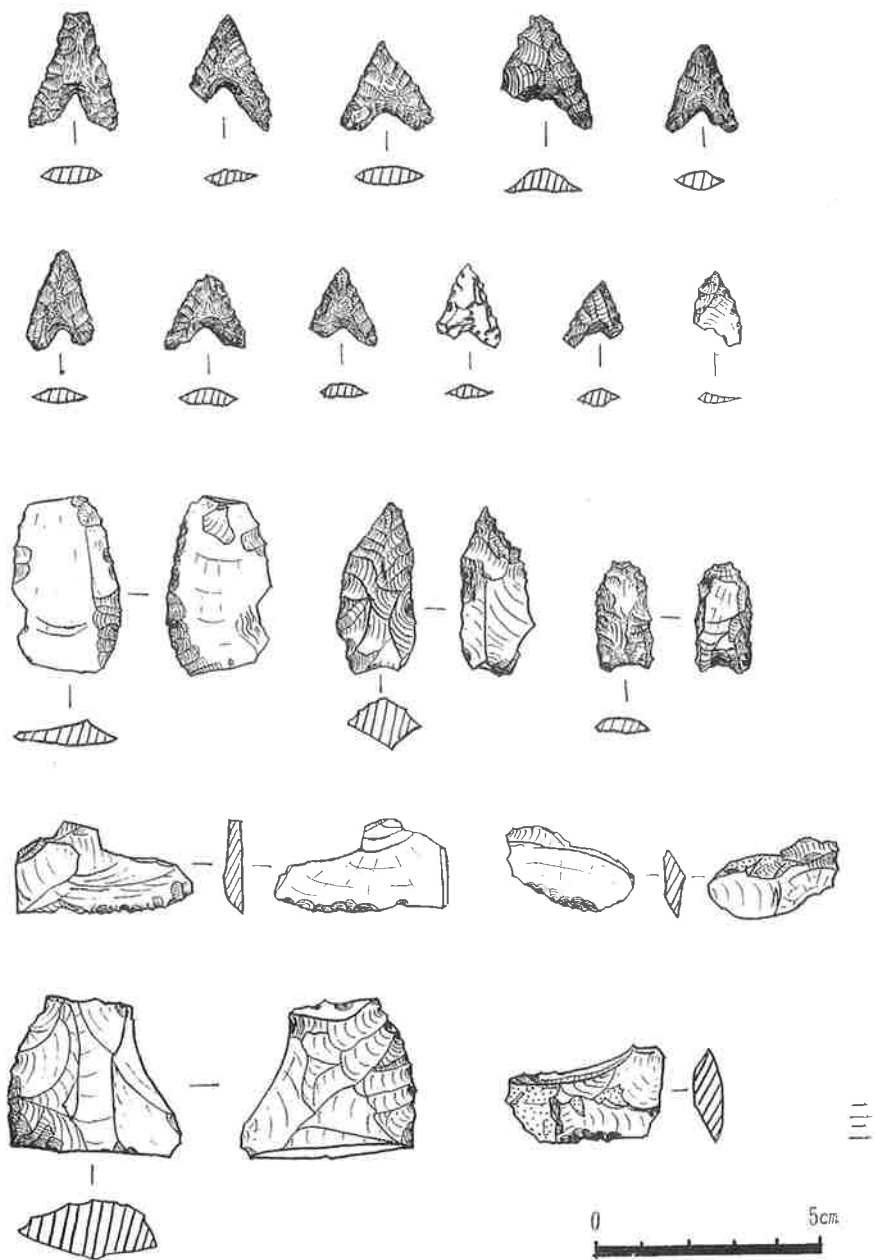
Ⅳ(c)層、この層は早水台一式下層にあたる包含層で、本層出土の土器は押捺文下層に位置する関係上、目下東九州で最も古い形態とみることができる。本層の押捺文下層は無文で著しく底部の尖る土器の類であり、九州においては稀にみる形態である。なお、本遺跡における土器は早水台遺跡出土土器と異なり、焼成硬質、色調黒褐色で一般に小型尖底土器である。

(2) 石 器

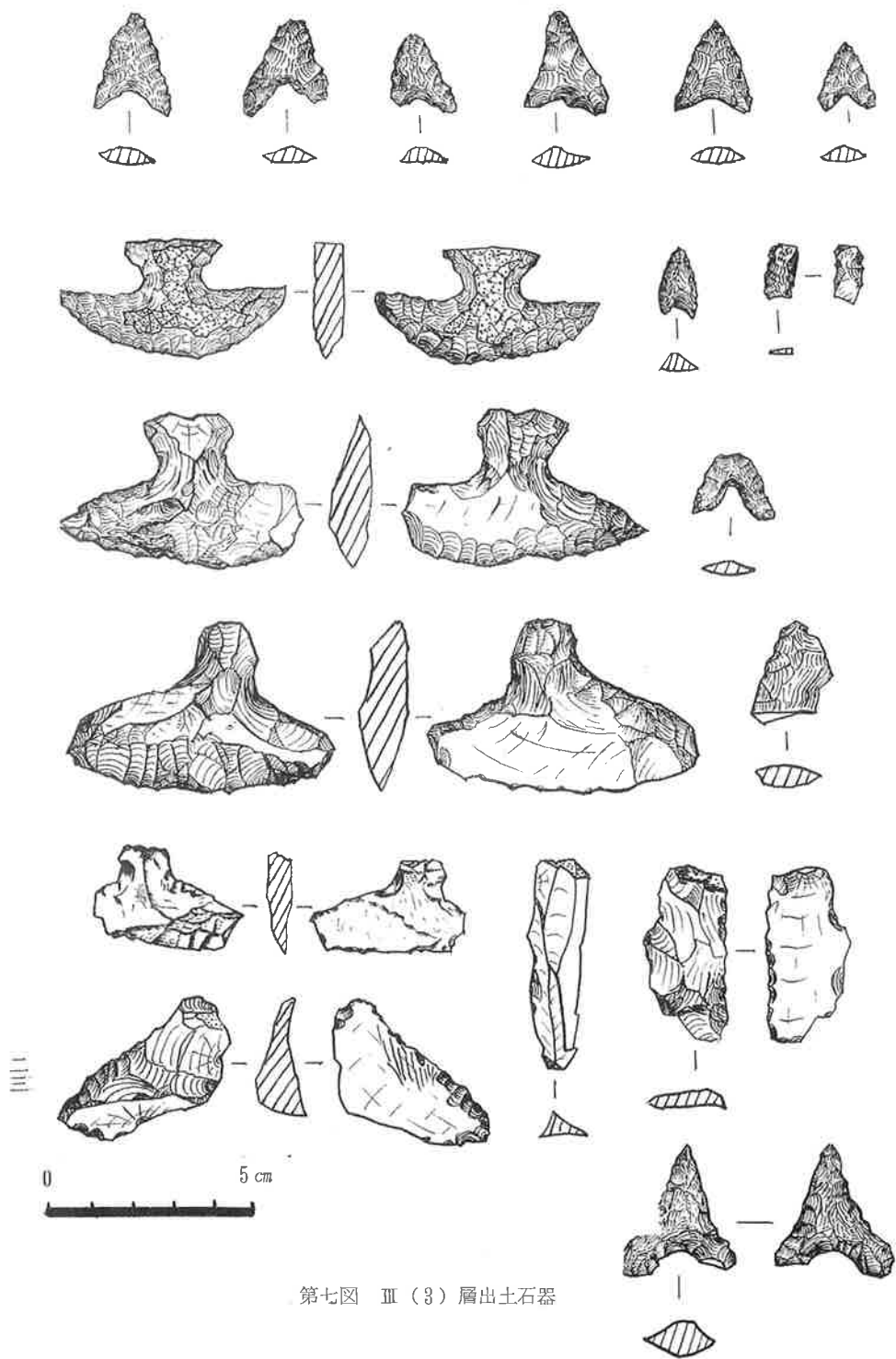
攪乱層から発見された後期旧石器時代の石器中、特にナイフ型石器が注目され、旧石器文化と縄文文化との関連性という点に調査の主力をおいた。結果はⅤ層において、旧石器時代の文化層とおぼしき層を発見したのみで、その層が確実に旧石器時



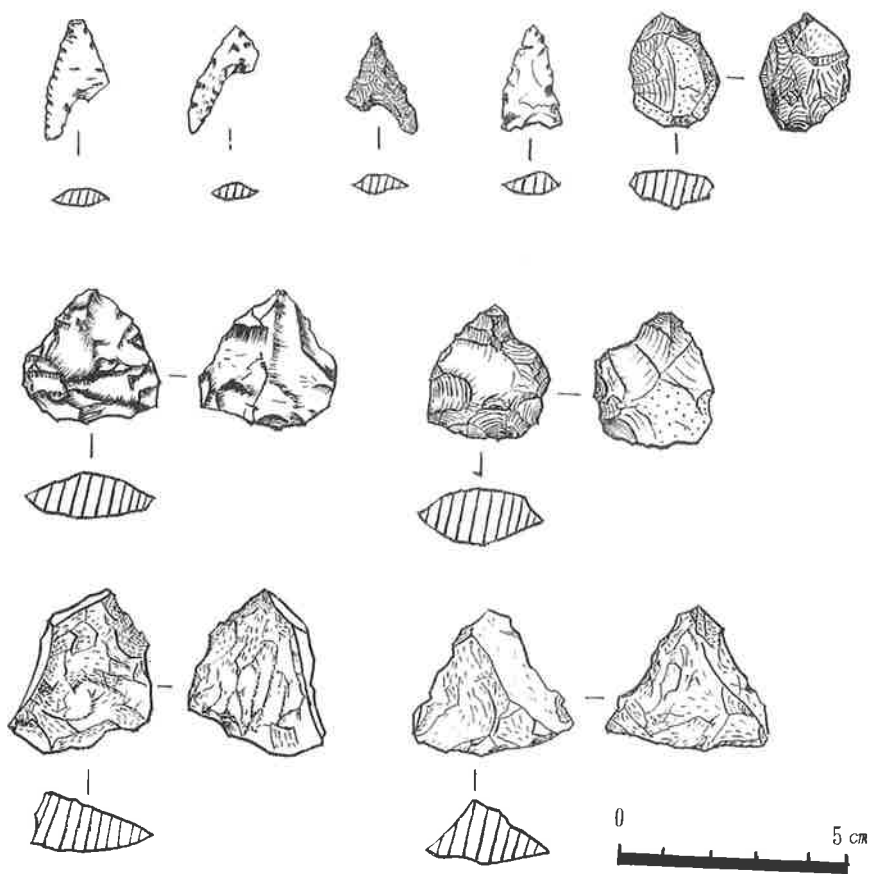
第五圖 I (1) 層出土土器



第六圖 II (2) 層出土石器



第七图 Ⅲ(3) 属出土石器



第八圖 IV (5) 層出土石器



第九圖 IV (8.9) 層出土石器

代文化層か否かについて明瞭にされなかつたことは前述の如くである。

石器は総数二百点に及ぶが、石器の種類としては、石鏃が最も多く、搔器・尖頭器などの剝片石器を多数出土した。この中石鏃は約半数が長さ一程程度の細石鏃で形態の統一をみる。

I層 石鏃を中心とし、剝片利用の搔器が少量混る。

II層 I層に引続き石鏃が多いが、尖頭器横匙が目立つ。

III層 石器としては、本遺跡においても多く出土しており、横匙の数が目立つ。

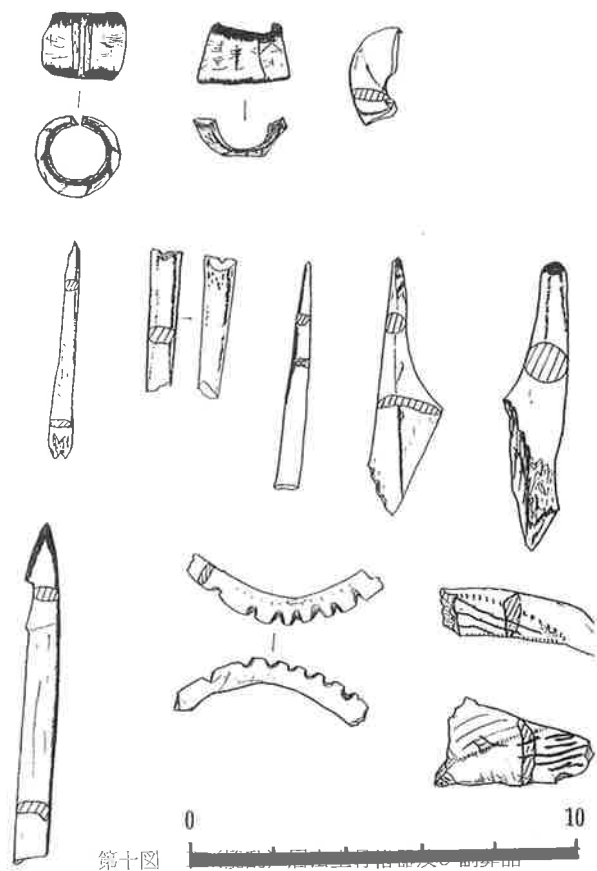
IV層 非常に小型の石鏃と剝片石器が出土する。石鏃は量的に少く、石質に変化が目立ち、上部各層に比較して、姫島原産の黒耀石が減少し、頁岩・サヌカイト・チャート・石英などが材料として使用されている。

以上層位的には、石器の種類、その形態など時代とともに幾分変化しながら発達して行く過程がみられた。特に興味深い問題は姫島産出の黒耀石の上限の問題、石英製石器の出現などである。前者は石器製作の材料として広く九州、瀬戸内に分布するものであるが、その石材利用が、IV層以下、即ち押捺文最下部より無文土器に至る縄文早期前葉には、姫島黒耀石の使用をみない。ここに姫島黒耀石の上限を縄文早期前葉に決めることが可能となる。この石材に変わるものとして目立つものは、阿蘇系黒耀石・チャート・サヌカイト類で特に小量ながら石英加工によつて小型石器を工作する例が指摘される。この石英利用は、旧石器時代において早水台遺跡などで検出される相当古式旧石器時代より使用されたものであると考えられ、その考証は東北大学芹沢長介助教授によつて目下細部検討が行なわれているので、その結果をまつことにする。ともかく石英利用の石器は本邦前期旧石器文化の所在を明確にすることができる注目すべき材質である。

(3) 骨角器及び副葬品

骨角器及び副葬品は、洞穴奥壁近い旧防空壕より出土して土類堆積の攪乱層において放置されたものであり、その年代を決定するにはあまりよい状態の出土ではない。しかし遺物は稀にみる形態の装飾具を含むもので、早期土器の攪乱層に混る。そ

の主要なものとして獣骨製耳飾り二点、石質不明緑色の扶状耳飾りなどである。獣骨製環状の耳飾りは、扶状形態をもち、石製扶状耳飾りと対比される貴重なものであつた。その他骨製のピン数点、骨鏃が上げられその量は可成り多い。骨製の他貝を使用したもので注目するのは貝輪（破損）で、その製法は大型二枚貝の中央を折り抜いて外縁に刻文を入れたものである。又巻貝の一部に太線を意識的に印したのが二点出土しているが、これは四国上黒岩洞穴の偏平石擦りの女性像と何か関係のある。図像刻線ではないだろうかとも考える。これらいずれも早期土器に混入しており、前期以前の遺物であることは確実である。



第十図

(4) 炉 趾

5層において、平岩を花卉型に組んだ炉趾が完全な形で発見された。早期の遺物包含層において炉趾の発見は稀で、神奈川県夏島貝塚より発見された例に対比される。本遺跡における発見例は、石組が花卉型に周囲をとり巻き、底部に平石をしきつめた完形資料で高さ七十五糎、直径九十糎、十個の石を使用して組立てたものである。炉趾中には他の小石を入れて、焼いた形跡がある。炉趾の使用を具体的に示した例としては興味深い一例といわざるを得ない。

(5) 自然遺物

本遺跡において、I、II層におけるカワニナ類の堆積、III層以下における厚い灰層は明らかに本遺跡を住居面として使用していたことは明らかである。そのため自然遺物として種々のものが出土したが、大別すると、貝類と獣骨に分けられる。貝類としては、淡水産のカワニナが大半を占め、鹹水産のものは、ハマグリ、カキ、ニナ、ハイガイ、シジミ、サザエなどである。獣骨はそのほとんどに人工的に割つた痕跡があり、食用としてのイノシシ、シカ、タヌキ、ウサギなどである。

人骨埋葬状況

本遺跡における人骨は、旧防空壕放出土類中より六体、発掘作業による出土は三体である。西日本における早期人骨の出土例として愛媛県上黒岩洞穴の遺骸が注目されており、他に顕著な例を聞かない。

本遺骸における遺骸の重要性は、早期遺物の包含層において層位的に出土されたことで、しかも同層位において可成り多量の放射性炭素の出土をみたことである。この炭素は現在英国、大英博物館放射性研究所において計測中であるので、いずれその詳報があるはずである。

発掘作業による人骨三体の出土層位は岩陰右壁下の押捺文土器包含の貝層より二体とその上層より一体発見された。骨出土層は早期遺物を包含する貝層で、上部の包含層との間には、整然とした間層で切断されている。このため下部二遺骸は確実に5層出土の押捺土器と同時期であると推定された。他の一体も層位は異なるが、関係出土遺物から早期人骨であることに間違いない。この三体の人骨中、一体は頭骨を初めほぼまとまりのある状態で出土し、他の二体は頭骨を除き整然と出土した。遺骸埋葬法において注目すべき点は、三遺骸共通に屈葬状態をなしている点にある。その点愛媛県上黒岩洞穴屈葬状態と同様の埋葬法で、早期遺骸の一種の葬例として屈葬風習の存在を意味している。本遺跡出土人骨の顕著な特徴として、次の点が上げられる。

- ①下顎骨の厚味が他地域で出土した他時期遺骸に比して、著しく低く、下顎骨枝は巾広い。

②九州の縄文人に対して比較的長頭で、人体が幾分小型である。

③長骨の大部分が断面菱形をなし、特に距骨の蹲踞面が著しい。この点から前かがみの姿勢の生活が相当多かつたものと推定される。

以上川原田人骨から縄文早期の埋葬状態に対する研究や骨格の各種、各部の特徴など細部にわたって研究する良好な資料を得たことになるが、ここに同様資料の四国の上黒岩洞穴人骨との対比研究が是非共要求されるようになった。さいわい川原田、上黒岩の両者とも新潟大学医学部小片保教授が同時研究を行うことになったため、縄文早期人骨の比較考証が行われ、いずれ細部の結果が発表されるであろう。

おわりに

川原洞穴における調査で、もつとも大きな収穫は遺物の層位出土であつた。攪乱層より出土した後期旧石器前葉のナイフ形石器について層をつかむことができなかったが、それでも押型文土器の包含層下に無文土器と小形石鏃の新しいスタイルの文化を確認したことは注目すべきことであつた。

姫島産出の黒耀石の使用の上限についても永年注意していたが、本遺跡ではその問題についても新事実を挙げた。即ち縄文各期を通じて非常に多量使用された姫島黒耀石は縄文早期の前葉に姿を消し、他石材を使用することが明かとなつたことである。注目すべきものがある。

人骨の早期包含層の出土も興味深い。しかも、その遺骸三例とも屈葬をしていたことは更に調査者を驚かせた。更に人骨の細部の調査から興味深い結果がでると考えられるが、いずれも層位の明確な地点よりの出土であり、それが多量の放射性炭素の測定可能なものであるので、今後の細部研究が楽しみである。

(この研究は文部省科学研究費による)